

地域における水環境問題への取り組み

—アジア太平洋水サミットの成果を引き継ぐ—

大分大学 学長 羽野 忠

新しい年が明けて既に2ヶ月が終わろうとしています。今年も、環境問題に対する国民の関心は、ますます高まることと思われます。一昨年夏の猛暑で我が国の最高気温記録が塗り替えられたこと、昨年は秋遅くまで温暖な気候が続いており、加えてこの冬の平均気温もまた例年より高めに推移するなど、地球温暖化との関連が指摘される事象の発生が明らかに増えています。温暖化の進行をいかにして抑えるかが、世界的な課題になってきたと言ってよいでしょう。昨年七夕の日にかかれた洞爺湖サミットでは環境問題が主テーマとなり、当時の福田首相もこの件でリーダーシップを見せました。会議全体の評価は様々であるものの、消極的ながら米国も含めて環境問題重視の方向性を打ち出せた点は、評価できるのではないのでしょうか。また一昨年のことですが、「不都合な真実」で名を馳せたゴア前副大統領と国際機関であるIPCCが2007年度ノーベル平和賞を受賞したことも、環境意識の高まりをもたらしたでしょう。排水処理の研究に手を染めはじめた若かりし頃、環境研究ではノーベル賞は取れないなどと言われていたのを、思い出しました。

このような環境意識の高まりを背景に、国としての全体的な取り組みとともに、地域における環境をめぐる諸活動がたいへん活発になっています。自治体の行政レベルでの意識啓発キャンペーンなどもさることながら、住民が中心となったNPO活動や、大学における教育・研究とNPO活動との連携など、非常に多様な活動が展開されはじめています。対象として地球温暖化から地域の環境問題まで幅広く取り上げられていますが、地域における活動では、河川や海浜など水に関連したNPOが多いのではない

でしょうか。筆者の住む大分県では、この傾向が顕著のようです。

一昨年12月に「水の安全保障：リーダーシップと責任」をテーマとして大分県別府市で開かれました第1回アジア太平洋水サミットでは、日本・オランダ両国の皇太子殿下はじめ36カ国のアジア・太平洋地域の各国首脳ならびに水行政担当者など231名が参加されました。2日間にわたって開催された公式イベントに加えて、数多くの関連企画が県内各地で開催され、国内外からの多数の参加者でたいへん盛況でした。この会議での議論の成果は「別府からのメッセージ」としてまとめられ、そこでは世界各地における様々な水問題の解決に向けた強い意志が表明されています。この会議の初日オープニング行事においては、我が国の皇太子殿下が江戸時代の水運に関するご講演をなさいましたが、筆者は初めて殿下のご講演をうかがいました。またこの会議では大分県内の4大学（日本文理大学、別府大学、立命館アジア太平洋大学、大分大学）が共催して「学生水フォーラム」を企画し、オープニングイベント終了後のメイン会場で、各大学の学生諸君がそれぞれの研究成果を発表しました。このような大学の枠を越えた企画は初めてで、学生諸君にとっては、大変インパクトの大きな催しとなりました。

今回のサミット開催地には多くの都市が立候補しましたが、大分県は水資源に恵まれていることから、選定されたと聞いています。たしかに、豊かに発達した海岸線と美しい海、多くの一級河川と九州トップを誇る水質の素晴らしさ、さらに全国一の規模を誇る温泉や県内至る所で湧き出す名水なども、水資源の一つでしょう。これらの水資源を、県民は普段

意識せずにふんだんに使っています。しかし今回の水サミットを通して、実は地球上いたる所で水資源が減少あるいは枯渇していることを知り、県民の認識は相当高まったのではないのでしょうか。

この様に、第1回アジア太平洋水サミットは多くの成果を挙げて閉幕しましたが、開催県としてこの成果を引き継いでさらに大きな運動として育てるために、実行委員会(委員長は県知事)より、県内に特定非営利活動法人を設立して運動を継続させるという提案がなされ、県内の大学が中心となってその準備にあたることとなりました。こうして、大分県内の水に関わる活動に対して支援を行うとともにネットワーク化を図り、水に関する知の集積を推進すること、もってアジア太平洋地域の水環境の保全に寄与することを目指し、特定非営利活動法人「大分水フォーラム」が設立されました。設立にあたっては、大分県、水サミットを支援された県内の産業界、水に関連した特色ある活動を展開されている多くのNPO、そして水環境に関する教育研究を行っている県内の大学及び高専、これらすべての皆さん方の強力なご支援を受けました。この意味で、大分水フォーラムは、まさに産学官民の共同事業であると申してもよろしいでしょう。フォーラムは昨年7月に設立総会を開催し、10月末に県の認証を受けました。事務局は大分大学内に置き、理事長は筆者が仰せつかっています。既に水環境に関する各種の活動を積極的に企画するとともに、県内で開かれるイベントの支援を行っています。活動の一つに、大学・高専における教育との連携があります。大分水フォーラ

ムでは、先日、前述の県内4大学及び大分高専と共催して、学生諸君による「学生水フォーラム」を開催しました。発表者の研究対象は河川水から海、温泉、塩田、棚田と幅広く、また理系に限らず社会科学系のテーマもあり、まさに総合科学としての環境を学ぶ良い機会になったと思います。この様な、国公私の別を越えた地域の大学間連携は、今後重要性が高まるでしょう。一方大分大学では環境に関する教養科目を開講していますが、県内NPOの支援を受けて講義や演習を行っています。地域のNPOと大学が環境教育面で連携する動きは、地域における環境活動の新しいスタイルとして今後広まることでしょう。

先日、東京国立近代美術館の特別展示で、横山大観の水墨画「生々流転」を観る機会がありました。全長40メートルに及ぶこの作品(重要文化財)は、大気中の水蒸気からできた1粒の水滴が川をなし海へ注ぎ、やがて龍となり天へ昇るという水の一生を描いたもので、その迫力に圧倒されました。単に水の風景が描かれているのではなく、川や海で生活する多くの人や動物の生活も描き込まれており、凧や嵐、急流から大河まで、水のあらゆる姿と変化を描き尽くしていると言えるでしょう。「生々流転」は大観55歳の作です。「生々流転」とは、「万物は永遠に生死を繰り返し、絶えず移り変わってゆくこと」という意味の言葉です。まさに、地球規模での水循環を描いた作品、との印象を持った次第です。

(2009年2月記)